人生100年 健やかに生きる

～体育・スポーツとともに～ ㉝

NPO法人 ならスポーツクラブ理事長
北 良夫（91）

蘇る9月の思い出

二つのアクシデント

ことしは殊の外暑い夏だったが、パリオリンピック、パラリンピックの熱戦に、暑さを忘れてテレビ観戦などで夏は終わった。9月を迎えると毎年思い出すことがある。

1975年（昭50）第30回国民体育大会夏季大会が、三重県四日市市で開催され、県選手団本部の役員として参加した。開会式前夜の出来事である。夜半突然激しい腹痛に襲われ、救急車で病院に運ばれた。病院には昨夜の夕食会で、声をかけあった他府県の役員の姿があって、そこで初めて宿舎の夕食による食中毒の発生を理解した。夜が明けて開会式の朝が来たが病室から出られず、その後4日間外出禁止、退院の許可が出たときは、すでに閉会式が終わっていた。三重県知事はじめ、大会本部から、お見舞いやお詫びはあったが、何のための大会参加だったのか、思い出したくない三重国体夏季大会の出来事である。

それから9年経って、84年9月8日、奈良県民待望の第39回国体奈良大会（わかくさ国体）夏季競技大会開会式で、思わぬアクシデントが発生した。午前7時30分頃、開会式会場前の広場に集まった県選手団の旗手から、県旗がまだ届いていないと告げられた。

担当者が県庁に県旗を忘れてきたので取りに戻ったとの報告。会場（現コンベンションセンター）と県庁は車で往復30分ぐらいの距離、時間は十分にあと戻ってこなかった。連絡を取る方法もなく焦った。県旗は入場行進だけでなく、開催県の役割である選手宣誓にも、県旗なしでは済まされない。

思いついて、プール事務所に駆け込み、日々掲げている県旗を出してもらった。やや小さめだったが何とか入場行進には間に合った。行進が終わって全選手団がプールサイドに整列、式典が始った時ようやく県旗が届いた。主催者のあいさつの最中、整列している選手団の中に潜り込み、県旗を取り換えた。安心していた。

ところがこの日は開会式で、交通規制が敷かれ車は予定通りには動けないことは頭になかった。携帯もない時代、担当者の戻るのを待つしかなかった。十分時間があると思っていたが、開会式の通告が始まっても担当者は会場は何事もなかったようにプログラムは進み、選手宣誓に正規の県旗を片手に、堂々とことは進んだ。多くの報道陣に囲まれ、滞りなく式は終わった。この日は会場開門の頃から、入場行進が始まる直前まで小雨だったが、式典が始まる頃から雨は上がって、爽やかな初秋の開会式となった。

翌日の新聞記事、そして、その後作成された「わかくさ国体」グラビアには、県選手団の入場行進と、選手宣誓で使った二つの県旗が掲載されていた。その違いを知るものは数人だった。

国体が終わり数カ月後、国体ムードも一段落して、やっとこの時のトラブルが笑い話として話せるようになった。しかし、一つ間違えれば取り返しのつかない騒動になっていたかもしれないこのトラブル、何もなく終わったので後日は笑い話だが、あの時プールに県旗がなかったらどうなっていただろうか。思い出すと今でも胸が痛む。県営プールは移転して周辺の環境も、すっかり変わったにもかかわらず、9月の季節を迎えると、今でも当時が蘇り鳥肌が立つのである。

わかくさ国体の夏季競技大会開会式で入場行進する県選手団＝1984年9月8日

＝第4土曜日掲載＝